

MUFG 工芸 プロジェクト

「持続可能な未来のために —工芸の伝統と革新—」展

場 所 | 三菱UFJ銀行本館1階正面玄関(東京国際フォーラム側)

主 催 | 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ

総合監修 | 秋元雄史

什器デザイン | ODS / 鬼木デザインスタジオ

文責 | MUFG工芸プロジェクト



開化堂



京都 最高級茶筒司
開化堂
創業明治八年

明治8年より茶筒づくりを続けている開化堂は、その技術の高さで知られる。へこみなどを修理することで、数世代にわたって使い続けることが出来る、サステナブルな機能美が評価されている。近年では茶筒以外にもコーヒー缶、バスタ缶といった暮らしの道具からアート作品まで領域を広げている。



茶筒 銅 平型400g(写真中央)
茶筒 銅 平型200g 経年変化 5年経過(写真左)
リメイク缶(写真右)

胴を二重構造にし気密性を追求した「茶筒」。長く使い経年変化した色も味わい深い。「リメイク缶」にこめられた作者の思いは次のようなものである。「ただ捨てる事だけが未来ではない。新しい素材を見つけることができなくとも、使われなくなった缶を元に開化堂の技術で作ったリメイク缶。こうした事が、職人を忙しなく、再利用してものに新たな道を作る未来となるだろう。」

桑田 卓郎

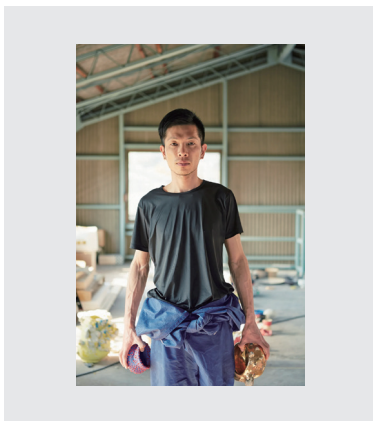


Photo by Koho Kotake

桑田卓郎は多治見市陶芸器意匠研究所を修了し、多治見市を拠点に制作を手がけている。世界各地で展覧会を開催、作品は世界各地のパブリックコレクションに収蔵されている。伝統的な陶芸の美を独創的に表現し、新しい「KOGEL」の世界的評価を高めている一人である。



カップ

陶芸の歴史と伝統技術に基づきつつ、大胆な造形とカラフルな色遣いで独自の世界を切り拓いている桑田卓郎の「カップ」シリーズ。今までの焼き物が持つ概念を変える、現代的で自由なデザインは、日常的に使うことが出来る。

中川 周士



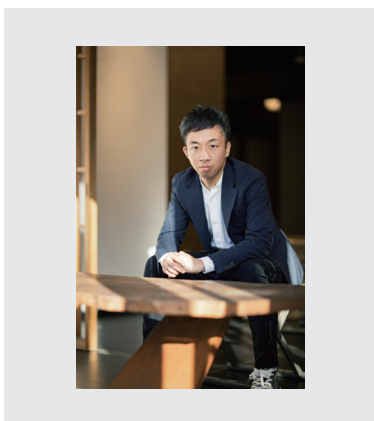
中川周士は大学卒業後、中川木工芸にて人間国宝の父に師事。木桶屋の激減に危機感を感じた中川は、時代の変化を受け入れ新しいものを創る取り組みを開始。神代杉KI-OKEツールは英国ロンドンV&A美術館のパーマネントコレクションとなった。類稀な手の技から生み出される造形は国際的にも評価され、木桶の概念を変え続けている。



高野槇 WAVE

自由で美しい曲線を描いた「WAVEシリーズ」は、木桶の箍(たが)の位置を極端に下の方に配置することで実現した。テコの原理を使うことで上方に箍(たが)を無くし、自由に波型を表現できるようになったという。素材は高野槇(まき)という希少な木であり、軽く、水に強く、保冷に適し、結露も生じにくい。

奈良 祐希



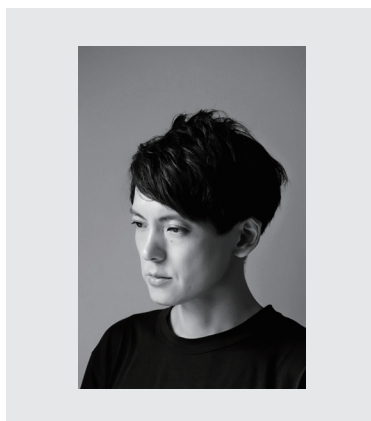
陶芸家・建築家2つの顔を持つ奈良祐希は、陶芸に“二次元的造形の三次元展開”という建築的発想を取り入れた制作をしている。作品の作り方は、真っ白な白磁で作った面を、立体的に組み立てるといった手法である。近年は異分野のクリエイターとのコラボレーションにより、表現の幅をさらに広げている。



Bone Flower

『設計の陶芸』
従来のような荘重な陶芸ではなく軽やかで透明な陶芸。周辺環境を引き込み、絶えず場所固有の空気を内包するものとして。内と外を明確に分けるのではなく、それらを優しく繋げていく温かな境界を持ったものとして。
(作家コメントより)

新里 明士



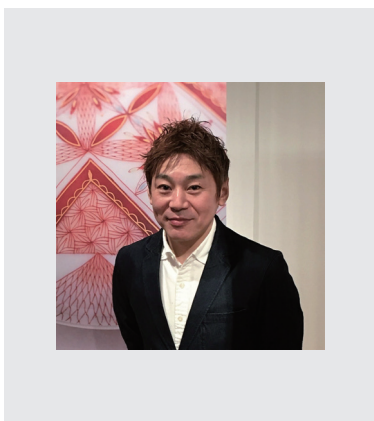
新里明士は千葉県に生まれ、多治見市陶磁器意匠研究所を修了、「光器(こうき)」と呼ぶ代表作品が国内外の注目を集める新進気鋭の陶芸家である。ろくろで成形した白磁の生地に穴を開け、穴の部分に透明の釉薬をかけて焼成することで、文様が浮かび上がる「蛸手(ほたるで)」と呼ばれる技法を独自に発展させている。



光器

ろくろ引きで創ったとは思えないほど薄く、重さを感じさせない造形。「光器」は、作品自体が光を帯びているように見え、土から出来ている器でありながら物質性を感じさせない独自の世界観をつづけている。

見附 正康



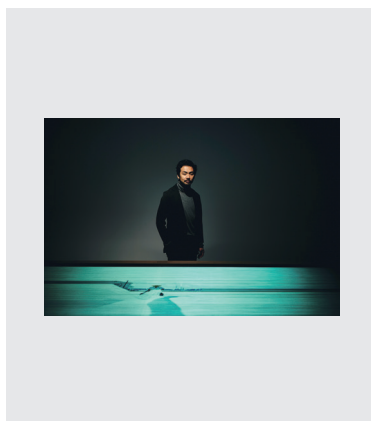
見附正康は、石川県に生まれ、石川県九谷焼技術研究所卒業後、福島武山に師事し九谷に伝わる赤絵の技術を取得した。見附が描く現代的で緻密な幾何学文様は、九谷焼赤絵の概念を変えるほどの革新的な表現である。



無題

九谷焼赤絵細描を継承する見附正康は、にわかには手彩とは信じがたいほどの微細な線と点で伝統的文様を描く。それらをリズムカルに配した幾何学的な図柄は精緻かつ大胆で、見る者を吸い込むような美しさには凄みさえ感じられる。

HOSOO



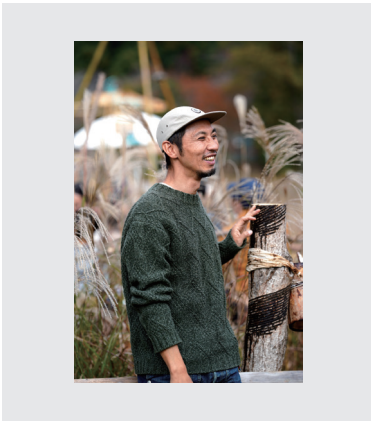
細尾真孝は、西陣織の老舗織屋「細尾」の12代目として、西陣織を改革するプロデューサーでありクリエイターである。HOSOOのテキスタイルは着物以外にも国内外のファッション、インテリア、車やホテルの内装まで展開する一方で、古代染色研究所による技術の継承、アーティストや研究者との共同プロジェクトなど、新しい革新の種を播き続けている。



「HOSOO Textile Collection Abstract」(写真左)
「HOSOO Cushion New York」(写真右)

1200年の歴史を持ち、高い技術と芸術性を持つ西陣織の可能性を広げる作品。「HOSOO Textile Collection Abstract」は西陣織の深い輝きと繊細な織の美しさを楽しめるよう、表装した作品。抽象画の世界から着想を得ている。「HOSOO Cushion New York」はクリエイティブで多様性を持つ国際都市ニューヨークから着想を得たテキスタイルデザイン。

堤 卓也



漆は、漆器や文化財などの塗料・接着剤として日本の文化を支えてきた貴重な素材であり、植える・育てる・作る・使う・修理するバリューチェーンが繋がって産業を形作ってきた。「堤浅吉漆店」の4代目である堤卓也は、日本産漆の生産/使用量の著しい減少に危機感を感じ、漆を知ってもらう活動「うるしのいっぽ」を開始した。

金網つじ



京金網の起源は平安時代までさかのぼると言われ、京料理に欠かせない道具として発展してきた。金網つじはその高い技術で従来の料理の道具にとどまらず、現代の暮らしを彩るランプシェード、コーヒードリッパー、アクセサリなどへと領域を広げる一方で、若手職人の育成にも力を入れている。

金網つじ



レトロフィッシュウッドサーフボード

「植えるから始まるモノづくり」をテーマに、自社で漆を植栽し、将来地元産材と育てた漆を使用したプロダクト制作の実現を目指している。その象徴として生まれたのが漆塗りサーフボード「Siita」。天然素材で環境負荷の少ないSiitaをアイコンに人と地球に優しい漆の魅力を伝えている。使い捨てが当たり前の時代に、壊れた物を直して使い繋ぐ金継ぎの価値観を広めようと、体験キット「金継ぎコフレ」を販売。



茶こし 真鍮 大小(写真左下)
ごまいり(写真右)
馬毛うらごし 5寸(写真左上)

「茶こし」は「菊出し」という技法と亀甲編みを組み合わせて編みこまれている。「ごまいり」の上部が斜めに開くのは、炒ったあとのごまを容器にうつしやすくするために、使う人のことを想う工芸の特徴が良く表れている。手作業による曲げ輪と手編みの馬の毛の網による「うらごし」は、しなやかな弾力があり、キメの細かい仕上がりを約束してくれる。

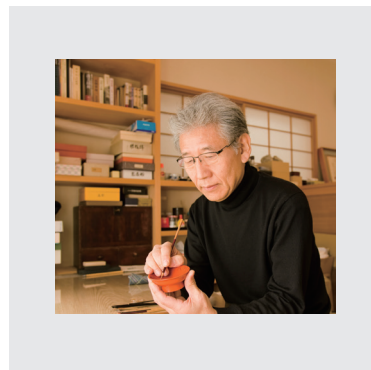
kanakeno 田山 貴紘



kanakeno

社長の田山貴紘は、会社組織を守りながら伝統技術と文化を継承していくことを模索し、分業化が基本の伝統工芸の中で、若手職人でも先輩の指導を受けながら一人で最後まで一つの作品を創るやりがいを得られるよう、新しい作品「あかいりんご」を生み出した。技術継承のプロセスについての1つの変革の取り組みと言える。

室瀬 和美(人間国宝) + 目白漆學舎



室瀬和美
漆芸家・重要無形文化財保持者(人間国宝)
1950年、東京都生まれ。2008年、重要無形文化財「蒔絵」保持者に認定。紫綬褒章受章、旭日小綬章受章。
目白漆學舎
2015年、東京・目白に開設。漆工芸文化の発展の継承をめざし、講座の開催、情報発信などを行っている。



あかいりんご

りんごのフォルム、表面の凹凸の少ない滑らかな造りでミニマルな印象の鉄瓶。焼き肌と焼き付け塗装と呼ばれる伝統技術が鉄瓶表面に独特の景色(模様)を浮かび上がらせる。今までの鉄瓶にはない新しい色合いで、使うほど鮮やかな赤が発色し、経年美化をずっと楽しんでいくことのできる作品。



漆椀 ちょらんま 三つ組

この漆椀は、登山家・三浦雄一郎氏の「アルミやプラスチックの食器では、登山中の食事はすぐに冷めてしまう」との言葉をきっかけに、漆芸家・室瀬和美が「漆のお椀は保温性と耐久性に優れ、食べる楽しみをもたらしてくれる」と構想・制作したものである。2013年、80歳になる三浦氏の世界最高峰エベレスト登頂時に使用され、標高8000メートルを超える過酷な環境下において食事のぬくもりと活力を提供した。漆という天然素材ならではの強みを活かした、丈夫で機能性の高い逸品——「漆椀 ちょらんま」は、その復刻版である。

セメントプロデュースデザイン 山本 裕輔 (印傳の山本)



CEMENT
PRODUCE DESIGN



左:金谷勉(セメントプロデュースデザイン 代表取締役)
右:山本裕輔(印傳の山本)

日本の中小企業の再生と向上を促進するデザインプロデュース会社。日本各地の伝統工芸やものづくりの技術から新たな価値を生み出すプロジェクトに取り組んでいる。このプロジェクトでは山梨県の伝統工芸・甲州印伝のつくり手である旬印傳の山本とコラボレーションしている。



SAIKA (甲州印伝) ロングウォレット / kanoko (写真左)
SAIKA (甲州印伝) カードケース / kanoko (写真中央)
SAIKA (甲州印伝) バスケース / kanoko (写真右)

鹿革に漆で模様をつける伝統的工芸品である甲州印伝。県内で農林被害が深刻化するニホンジカの皮を活用し、環境負担の少ない軽技術で作り上げた、新しくサステナブルな山梨産の印伝が誕生した。緻密なドットで鹿の子柄を表現している。

凛九 大内 麻紗子



企業デザイナー時代に、機械的に大量生産され消費されていく製品のあり方に違和感を覚え、一つ一つを大切に作るものづくりをしたいと考えるようになる。香川県漆芸研究所で漆芸の基礎を学び、その後三重県で神職が履く浅沓の製造技術を習得。現在は作品を通して漆の魅力を伝える活動を行っている。



蒔薔小箱 -凛-(写真左)
沈金小箱 -包-(写真右)

作品は、仏壇はなくても、大切な人やペットのお骨は側に置いておきたいという、これからの生活スタイルに合わせた骨壺をデザイン。「蒔薔小箱 -凛-」は、凛とした強さが縁(円)を重ねて広がっていく様子を表現した作品。「沈金小箱 -包-」は、静けさの中に優しい光が降り注ぐ様子を表現した作品。

凛九



『凛九』は東海3県で活動する女性職人グループである。伊勢根付、有松・鳴海絞、伊勢一刀彫、尾張七宝、豊橋筆、伊勢型紙彫刻、伊賀組紐、美濃和紙、漆芸の9人の職人が参加。長い間、日本の風土の中で育まれてきた伝統工芸を大切に受け継ぎ、女性らしい感性で新たな風を起こそうと活動している。

凛九 田村七宝工芸 田村 有紀



1883年創業の七宝の窯元 田村七宝工芸の5代目。武蔵野美術大学 建築学科にてデザインや人の生き方・暮らし方を学ぶ。在学中から表現の幅を広げるべく七宝制作と同時にライブアーティストとして活動。公募展入選、ディズニー&ピクサー映画『マイ・エレメント』ポスタービジュアルを七宝で制作、講演会、Youtubeなど幅広く活動。



紺地梅文様七宝宝石箱

尾張七宝は金属にクリスタルガラスを焼き付ける、絵柄を描くのに金や銀を使用する日本の伝統的工芸品。七つの宝物をちりばめているように美しいことから七宝と名付けられたと云われる。作品は、紺色の背景に梅文様を流れるように配置したデザイン。純銀線を立てて描き、焼成と研ぎを繰り返して完成させている。仕上げは艶消しですっきりと表現。

凛九 大須賀 彩



彩
Aya Irodori

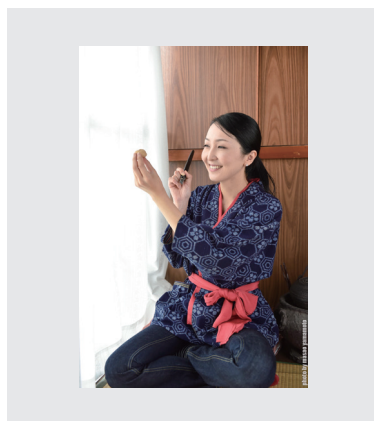
大学で有松・鳴海紋を知り、有松・鳴海紋会館で展示品を見たのを機に職人になることを決意。有松に100種類ある技法の中でも手筋絞り・雪花絞り・巻き上げ絞り・手蜘蛛絞り・板締め絞りを使い現代の感性をも取り入れた新しい商品を提案している。



彩Ayalrodori&月之(写真左)
彩Ayalrodori草履(写真右)

有松・鳴海紋は400年の歴史を持ち100種類以上もの技法を持つ染色技法。作品の「彩Ayalrodori&月之」は、月之オリジナルのガマ口金具を使用し、本体には作家が得意とする手筋絞りを施したエレガントな鞆。「彩Ayalrodori草履」は、施した手筋絞りとグラデーションが個性的な作品。

凛九 梶浦 明日香



NHKキャスター時代に伝統工芸の取材を通じて感銘を受け、後継者不足の現状に危機感を感じ職人の世界へ。根付職人となる。次世代の若手職人の活動の幅を広げるべく、様々な伝統工芸を担う若手職人のグループ『凛九』や『常若』を結成。



蓮(写真左)
祝い達磨(写真中央)
筍(写真右)

根付は、江戸時代に煙草入れや印籠、財布などの小物入れなどを紐で帯から吊るし持ち歩くときに用いた留め具。作品の「蓮」は全面に秘伝の技と言われる“浮かし彫り”を施してある。「筍」は成長が早いという縁起物。「祝い達磨」は大きく笑ってお祝いをしている達磨。

凛九 太田 結衣



結衣
一刀彫

伊勢一刀彫師・岸川行輝氏に出会い、師事。主に全国各地の神社の干支を制作。年に数回ワークショップを開催し、企業コラボ商品も制作。そこにあるだけで「ほっこり」できるような一刀彫をコンセプトに“心が豊かになるような一刀彫”を心に留めて「一刀彫 結」を手掛けている。



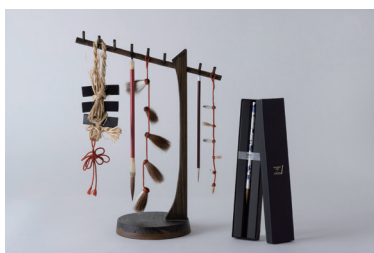
-遊- NO8 NO12 NO13

荒削りで大胆な造形が特徴の伊勢一刀彫。作品「一遊一」のモチーフである「金魚」の鮮やかな赤い色には強い呪力があり、病魔、災厄を退散させるといわれている。可愛くもあり、優雅で、どこか儚さもある金魚は、暮らしに遊び心と心地よさをもたらしてくれる。

凛九 中西 由季



幼少よりものづくりが好きで職人に憧れ、京都伝統工芸高等学校で2年勉強する。その間に、綺麗な伝統工芸を学び、使い手に寄り添う道具を作る職人になりたいと考える。卒業後、地元の豊橋筆に弟子入り。求められる筆を丁寧に作っている。



+ONE HANA(写真右)
繋がり2(写真左)

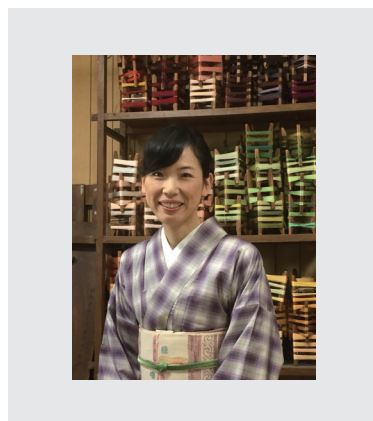
豊橋筆の起源は文化元年(1804年)といわれ、現在では全国2位の生産量を誇っているものの、担い手は零細な家内工業が多く、高齢化も進んでいるため、後継者の確保と育成、現在材料の保存と品質の向上などに積極的に取り組んでいる。作品の「+ONE HANA」「繋がり」は、豊橋筆に遊び心を加えた作品。

凜九 那須 恵子



屋号:型屋2110
伊勢型紙の緻密な彫刻に感動し、これを一生の仕事にしたいと決意。「型紙が100年先も染め手を支え、型紙で心を伝える」を目標に、制作に取り組む傍ら『凜九』や『常若』など異業種とのグループ活動を行い、伊勢型紙の魅力を伝える活動を行っている。

凜九 藤岡 かほり



大学卒業後、会社勤務を経て組紐店の四代目と結婚し、初めて組紐に携わる。伝統工芸士の母・藤岡恵子と夫の指導のもと、主に高台による帯締め製作を学ぶ。女性職人グループ『凜九』への参加をきっかけに、他の工芸とコラボレーションすることで新しい組紐の可能性を追求している。



ヒカリスク-刻-(写真右)
ヒカリスク-印-(写真左)

伊勢型紙は着物などに模様を染める為の伝統的な染色道具。青天の霹靂(新型コロナ)は日常を壊したが、本来の願いを思い出す好機となった。雷を成長の助けとするキノコなどをモチーフにした型紙「ヒカリスク-刻-」と、それで型染めたタペストリー「ヒカリスク-印-」。染め協力:赤塚染工場



60玉高麗組「雛」

組紐は仏具や装束、武士の武具、茶道具・根付やたばこ入れの紐などに使用されていたもの。作品の「帯締め60玉高麗組『雛』」では、男雛と女雛に見立てた帯締めにはそれぞれ、長寿の象徴でもある亀甲文様、末広がりの子孫繁栄などの意味がある扇面文様という、どちらも縁起の良い吉祥文様を入れている。

凜九 松尾 友紀



展示会で見た明かり障子の美しさをきっかけに和紙の世界へ。同じ紙を作るため、いつも違うことをする紙作りは、その難しさ奥深さで常に探究心を刺激する。「知識を得て腕にし、体得して心で渡く」を目標に、千年後に自分の紙が残っていたら、というロマンを胸にもものづくりに取り組んでいる。



ご朱印帳(写真左) ノート(染め)(写真右)
ポシェット(写真中央) 和紙色々(写真中央下)

美濃和紙は最古の紙として正倉院に所蔵され、1300年以上の歴史があるとされている。作品の「御朱印帳」「ノート」は墨ののりがよくなるようにブレンドした和紙を制作し、使用した特別な一冊。「ポシェット」は和紙を特別に厚く漉き上げ、こんにゃく糊で防水加工をしたのち絞り染めを施したもの。